

聖書: マタイの福音書2章1～15節

説教: キリストはどこで生まれたのか

はじめに

今朝は四本目のローソクに火が灯され、クリスマス礼拝を迎えております。普段であれば聖歌隊の賛美があつたり、礼拝の後には皆さんが持ち寄ったたくさんのごちそうをいただきながら祝会を開いて楽しい時間を持つのですが、今年は残念ながらそれが許されません。でも少し見方を変えれば、いつもの慌ただしさから離れ、人として来られた救い主を静まりながら思い巡らすことができます。それが今年のプレゼントなのかもしれません。

今朝はマタイの福音書2章を開き、イエス・キリストがベツレヘムでお生まれになったときなにか起きたのか。そして、それは私たちにどんなつながりがあるのか。ともに考えてまいります。

1 東の博士たち

1) 星に導かれて

1節。「イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。」

一説によれば、東の博士たちはバビロン—今のイラクのなかにありますが—その人たちで、星を見て未来のことを予測する、今でいえば占星術師を職業としていた人たちではないかと考えられています。バビロンにはかつて捕囚として連れて来られたユダヤ人が故国に帰らずに住んでいましたから、彼らから聖書のことを聞き、信仰者となったようです。あるとき夜空に輝く一つの不思議な星を見つけ、その星がユダヤ人の王の誕生を示している事を知り、救い主を礼拝したいと願ってバビロンから千キロ以上もの長旅をいとわずにエルサレムを目指します。

2) ユダヤ人の王はどこにおられますか

しかし一つだけ問題がありました。博士たちはユダヤ人の王が誕生したことは知っていますが、どの町で生まれたのかまでは分からない。とにかく、エルサレムに行けば誰か教えてくれるに違いない、そういうことだったようです。それで彼らはこう尋ねます。2節。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」

2 ヘロデ

1) キリストはどこで生まれるのか

これを聞いて驚いたのはヘロデ王です。将来ユダヤ人の王となる者が生まれる。これがもし本当であるなら、権力の座にある者にとって見のがすことはできません。どんなリスクであろうとも小さなうちに潰しておく。これが支配者の鉄則です。すぐに民の祭司長たちと律法学者たちを招集し、生まれた場所を調べさせる。今なら、よく耳にする「新型コロナウイルス感染症対策専門家会議」のようなものでしょう。聖書の専門家に調べさせた。

2) ミカ書の預言

学者たちはこう答えます。5, 6節。「彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で決して一番小さくはないあなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。』」

預言者というのはミカのことです。紀元前七百年頃に書かれたミカ書5章2節に救い主キリストのお生まれになる町の名前が記されています。

ヘロデは早速博士たちを呼び、この情報を伝えてから、「幼子が見つかったらすぐに知らせるように。私も行って拝むから」と言う。もちろんこれは嘘で、幼子の居場所を見つけて殺す計画なのです。博士たちはヘロデのそんな計画など気付かず、喜び勇んでベツレヘムに出かけ、幼子を見つけて礼拝できた。ああよかった、という話になる。

3) 人の弱さと罪

さてここで一度立ち止まります。これまでの話し、すっきりと腑に落ちたでしょうか。もやもやしませんか。理由は二つあります。

一つ目。博士たちは、遠い旅をしてエルサレムを訪ねるほどの熱心な信仰者であったのはよいのですが、でもエルサレムの町の真ん中で、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と叫んだことはどうなのでしょう。博士たちは、これがどんな影響を及ぼすか考えなかったのでしょうか。結果としては、幼子がベツレヘムで生まれたということを知られ、実際に会うことはできたかもしれない。でも

一方では、博士たちのことばがきっかけで、ヘロデは二歳以下の男の子を皆殺しにしてしまうのです。幼子イエスは危機一髪のでエジプトに逃れはしましたが、博士たちの不用意な言動によって救い主のいのちが危険にさらされたのです。それに加えてまったく関係のない子どもたちが殺されてしまった。なにか納得できない気持ちになります。これが一つ目の疑問。

そして二つ目。民の祭司長と律法学者たちは、聖書を一生懸命調べて救い主が生まれた町を突き止め、王に報告しました。王が生まれた場所を知って何をしようとしているのか、彼らはまったく気付かなかったのでしょうか。そんなはずはない。ヘロデがどんな人物であるか、皆よく知っている。ヘロデは、妻であろうが子であろうが、裏切り者だと思ったら平気で殺すことを繰り返してきた。そうすると、民の祭司長と律法学者たちは、ヘロデは救い主としてベツレヘムに誕生した幼子を殺すことを知りながらヘロデに事実を告げたことになります。それに対して神は何もなさらないのか。そんな疑問です。

3 キリスト

1) 何もできないのか

今年は例年に比べればだいぶ静かではありますが、スーパーに行くときと讃美歌が聞こえてきて、「救い主がお生まれになりました。おめでとう。」という雰囲気になります。しかしいま見たとおり、救い主が誕生したとき、とても手放しでは喜べないことが起きていました。大切な救い主がお生まれになるのですから、こんな危険な目に遭わないように、もっと安全なやり方というものはないのか。ところがなぜかこの方は生まれたときから危険と隣り合わせで、死という影がつきまとうのです。

神の力が弱いということなのでしょう。エジプトに間一髪で逃れることができたのは、たまたま運がよかっただけで、神の救いの計画は人の罪によって変更を余儀なくされることもあるのか。

2) 神は介入する

博士たちについて考えてみましょう。確かに彼らの行動は軽率で、ことの重大さに気がついたときはもう手遅れに見えました。でも12節にこうある。「彼らは夢で、ヘロデのところへ戻らないようにと警告されたので、別の道から自分の国に帰って行った。」

博士たちがもしそのままエルサレムに戻ったなら、ヘロデは幼子がいる場所を聞き出して、すぐに殺し屋をベツレヘムに向かわせたはずで、そして口封じのために博士たちも殺したでしょう。そのようにならないようにと、神は適切なタイミングで適切な介入をします。神には手遅れということはありません。

では、民の祭司長と律法学者たちについてはどうでしょうか。本来なら彼らは自分の立場上、救い主のことを最も大切に思わなければならないはずなのに、救い主が殺されるように仕向けていく。ひどい話ですが、そんなことで神のご計画がゆるぐことはありません。神は適切なタイミングで適切な介入をなさいます。13節。「彼らが帰って行くと、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。『立って幼子とその母を連れてエジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています。』」

このようにして主は、ヘロデが仕組んだ周到なの計画を台無しにさせます。

3) 十字架に向かうために

しかし、それですべての問題が解決したわけではありません。今日は読みませんでした。このあと怒ったヘロデはベツレヘム周辺に住む二歳以下の男の子を殺してしまうという悲劇が起きます。イエスが助かるためには、他の子どもたちが犠牲になるのはやむを得ない。神には手遅れはないと言いつつ、これは、これまはまさに手遅れではないかと、怒りを覚えるかもしれません。そしてこう考えます。「もしミカが、ベツレヘムという町の名を記さなかったなら、こんなことにはならなかったはずだ。神はこうなることを予想できなかったのか。」

いいえ、神はこのようになることをご存じでした。ベツレヘムという名前が、ヘロデに悪用されることを知りながら、あえて聖書に記したと考えるべきです。それはなんのためでしょう。結論から言いましょ。主が十字架のみわざを完全に成し遂げるためです。いったいなにがどうつながってそんな話になるのでしょうか。

あの母親たちを見てください。ベツレヘムの周辺で生まれたという理由だけで、ある日突然、自分の腕から子どもが奪われて目の前で殺されていく。こんな理不尽な話がどこにありますか。母親が泣き叫びます。誰も慰めることができません。エジプトに逃れたイエスの耳にはこの叫びは聞こえ

なかったのでしょうか。いいえ、主は聞いています。イエスもともに泣いていた。どうしてそれがわかるか。

この方は最期になにをされたか。母マリアの目の前で十字架におかかりになり、あの虐殺された子どもたちと同じように、この方も殺されていったのです。ただの同情とは違います。すべての人たちを救うためにいのちをお捨てになったのです。ということは、クリスマスというのは主がお生まれになったというだけではない。主はだれのために十字架におかかりになるのかを、明らかにしてください。さったときでもあった。そのように見ることができます。

私たちは思いがけないことが起きたとき、「神はどこにいるのか。神は私を見捨ててしまったのか。」希望が見えないような現実を前にしてそんなふうに叫ぶことがあります。でも、思い出していただきたい。主は誰のそばにおられるのですか。子どもを殺された母親と一緒に。殺された子どもたちのいのちを母親の手に取り戻すために、ご自分の命をお捨てになられたのです。ならば私たちにも同じことをしてくださるのではないですか。

人の心の悲しみの真ん中に小さなお姿となって来てくださった主の御名をあがめます。